クマさん

yamanekonoko

やさしいクマさん

むかし　むかし

とある山の奥にお父さんとお母さんと女の子の

三人で暮らしている家族が住んでいました。

その家族の隣には

クマさんが住んでいました。

その家族とクマさんはとても仲良しでした。

クマさんは取ってきた魚やはちみつを

隣の家族へ分けてあげたりしました。

お父さんとお母さんが山を開拓してできた畑で

作った野菜をクマさんに分けてあげます。

冬の寒い日には

女の子は冬眠をしているクマさんのところへ行き

抱かれるようにして眠りました。

ある日

冬眠から覚めたクマさんは

雪解け水がゴーゴーと流れる川で魚をとっていました。

そこへ女の子がやってきました。

クマさんは言いました。

「危ないから近づくんじゃないよ」

女の子はしばらくの間

やっと咲き始めた小さな花を摘んで遊んでいましたが

帰ろうと立ち上がった瞬間足をすべらせて

川の中へ落ちてしまいました。

クマさんはあわてて

女の子を抱き上げようとしましたが

川の流れがあまりに速かったので

クマさんも立ち上がることができず

女の子の腕をそっと噛んで

岸まで引き上げようとしました。

しかし雪解け水の流れはあまりにも速く

クマさんの口に力が入ってしまいました。

女の子の腕からは

赤い血が流れてきました。

クマさんは心の中で

ごめんね

もう少しのがまんだｊから…

そこへ山の猟師が通りかかりました。

たいへんだ！

女の子がクマにたべられているぞ！

猟師は鉄砲でクマを撃ちました。

そして女の子を助けました。

お父さんとお母さんは猟師にお礼を言いました。

でもクマさんが女の子を襲うはずはないと言いました。

猟師は

「どんなに人に慣れているやさしいクマでも

　冬眠開けで腹を空かせたクマは何をするかわかったもんじゃない」

と言いました。

「その場にいた自分が一番よくわかっているんだよ」

お父さんとお母さんは

何も言い返すことができませんでした。

そして

なんとなく

そうなのかなぁ～

と思うようになっていきました。

なんたって女の子は助かっているわけですから……

乱暴者のクマさん

むかし　むかし

とある山奥にとても乱暴者のクマがいました。

そのクマは森の動物たちみんなから

恐れられ

そして嫌われていました。

そのクマは何が気に入らないのか

手当たり次第森の木々をへし折って行きました。

たとえお腹がいっぱいでも

木の実を取り地面にばら撒いていきました。

お腹が減って無くても

魚を取り

当り一面魚の死骸だらけにしていきました。

森の動物たちは

そのクマに遭わないように気をつけているのですが

もし

ばったり遭ってしまったらたいへんです。

一目散に力いっぱい逃げるか

あきらめるしかありません。

そんなある日

クマはいつものように森の木々を蹴倒しながら

歩いていると道に迷ってしまいました。

手当たり次第木々を倒していくので

森の様子も変わってしまっていたのです。

クマは人間たちが暮らす山のふもとまで

出てきてしまいました。

そして人間たちが作った道路を横切ろうとした時

もうスピードで走ってきた車とぶつかってしまいました。

車は山の斜面にぶつかり止りました。

クマは命こそ助かりましたが、

立ち上がるとこはできませんでした。

そこへ一台のパトカーがやって来て

「良かった

　この車には誘拐された女の子が乗っていたんだ。

　このクマのおかげで

　女の子は無事助かったし

　犯人も捕まえることができた」

とおまわりさんは言いました。

そのクマは動けるようになるまで

人間たちに手厚く看病をされることになりました。

森にしばしの平和が訪れました。

動物たちは大喜びしました。

しかしそんな平和な日々は

長くは続きませんでした。

クマの怪我が治り

山に返される日がやってきました。

人間たちはクマにお礼を言いました。

「ありがとうございました。

　クマさんのおかげで女の子を救うことができました

　これからはあなたの山に帰り今までどおり暮らして下さい。」

クマはおりから放たれ山へと帰って行きました。

……

あ〜ぁ

臆病者のクマさん

むかし　むかし

とある山の奥にクマさんが住んでいました。

クマさんはとても臆病だったので

他のクマさんのように

お腹が減っていても

村まで降りて行って

野菜や果物を取って食べることはできませんでした。

村ではクマがやってきて

せっかく作った作物や果物を食べるので

大騒ぎをしていました。

「クマが出たぞ！！！」

猟師が鉄砲でクマを殺しまします。

臆病なクマさんもお腹が減っていたので

本当はとても美味しそうに見えている果物が

欲しくて仕方がありませんでした。

クマさんは考えました。

そうだ

僕がクマでなければいいんだ

僕はクマを辞めることにしよう

誰かと変わってもらうことにしょう

クマさんはたぬきさんの所へ行きました。

「たぬきさん

僕の名前と取替えっこしませんか？」

たぬきさんは断りました。

たぬきさんもクマにはなりたくありません。

クマさんはうさぎさんの所へ行きました。

「うさぎさん

僕と変わってもらえませんか？」

うさぎさんもクマにはなりたくありませんでした。

クマと聞いただけで殺されてしまいます。

クマさんはおさるさんの所へ行きました。

さるは言いました。

「いいですよ

　私は猟師に見つかっても逃げることができますからね

　でもその前にひとつお願いがあります。

　今子供が病気で

　遠くまで食べ物を取りに行くことができません。

　そこでクマさん

　山里に見えているあのおいしそうな柿を取ってきてくれませんか？」

クマさんは喜びました。

「まかせてください

僕のおおきなからだで

両手いっぱいの柿の実を持ってきてあげます」

クマさんは山里まで降りてきてしまいました。

村人たちは大声で叫びました。

「クマがでたぞ〜」

クマさんの親子

むかし　むかし

とある山の奥にクマさん親子が住んでいました。

その山には木の実がいっぱい実り

綺麗な花が咲き誇り

動物たちが楽しく暮らしていました。

ある秋の日

その山に今までに体験したことがないような

とても大きな台風がやってきました。

荒れ狂う風と

滝のように流れ落ちる雨

地響きもなり響き

動物たちはただ

その嵐が通り過ぎるのをじっと息をひそめて待つしかありませんでした。

一夜あけて

嵐が去った後の山は様子が一変していました。

大木は倒れ　川はゴーゴーと音をたてて

周りの物を全て呑み込んで流れていました。

なにやら山里の方でも大きな被害があったらしく

村人たちが大騒ぎをしていました。

山の斜面が崩れ道路は寸断され

村の家々は風に吹き飛ばされていました。

何人かのお年寄りが行方不明になっているようでした。

たくさんの人が町からやってきて

行方不明の人たちを探したり

壊れた家を取り除いたり

道が通れるようにしていました。

また

その様子を報道しようと

テレビカメラを抱えた人たちもたくさんいました。

そのころ

山の奥でも動物たちが大騒ぎをしていました。

「お母さんが

　病気で寝込んでいる隣の山にいるおばさんに

　たくさんのどんぐりを持って見舞いに行ったまま帰ってこないんだ。

　僕が探しに行って来る。」

と　子クマは言いました。

だめだ！

今　山を降りたら人間に見つかってしまう。

そしたら　君は殺されてしまうよ

と　すこし歳を取ったたぬきが言いました。

「でもお母さんは怪我をしているかもしれないんだ」

「だめだ！

今はとてもたくさんの人間がそこらじゅう

うじゃうじゃいるんだよ

テレビカメラを持った人間に見つかったら

この山はもうおしまいだ

やれ研究のためだ　とか

ものめずらしさだとかで

たくさんの人間がこの山に入ってくるんだ

そしたらもう僕たちはここには居られない。

僕はそんな風に山を追われた仲間をたくさん知っているんだ。」

と　疲れた顔をしたいのししが言いました。

「でもお母さんは大きな木の下敷きになって動けないのかもしれないんだ」

「この山の動物たちが

山を追われるようなことになったら

もし君のお母さんが帰って来ても住む場所はないんだよ」

と　物知り顔のさるが言いました。

「今は待つしかないんだ

あの　うじゃうじゃいる人間たちがいる間は……」

子クマは復旧作業に動き回っている人間たちを

恨めしそうに見ていることしかできませんでした。

クマさん

http://p.booklog.jp/book/89696

著者：山根仔のこ
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/yuzunohaha/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/89696

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/89696

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ